
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.126

July 2022

2022 年度年次大会（10 月 15～16 日） プログラム決定 ハイブリッド形式で開催予定



(会場 法政大学市ヶ谷キャンパス)

【2022年度ロシア史研究会大会について】

6月下旬から新型コロナウイルス新規感染者数が増加傾向にあり、予断を許さない状況ではありますが、現時点では、すでにお知らせしたとおり、ロシア史研究会 2022 年度大会は 10 月 15～16 日に法政大学市ヶ谷キャンパスで、ハイブリッド形式で開催される予定です。今後、全面オンライン開催に変更する可能性がありますので、事務局からの連絡にご注意ください。

また、対面の懇親会は、開催可能な手配をしておりますが、実施は感染状況を見て判断いたします。

大会プログラムの概要は以下をご覧ください。今大会では、共通論題 B の登壇者がアメリカからオンラインで参加予定のため、共通論題としては異例ですが、共通論題 B は午前中の設定となっております。

報告要旨は次号（大会特集号）に掲載予定です。

会員の皆様の積極的な参加をお待ちしております。

大会に関する事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局 (mhamamoto/あっと/omu.ac.jp [/あっと/を@に変換してください]) 濱本宛にお送りください。

<大会時の託児補助>

今年度は、「任意の託児所利用に対する補助」（自宅でのシッター利用等に対して、1 日につきお子様 1 人あたり 5000 円を支給）を実施いたします。8 月下旬に ML において告知し、その後に申請を受け付けます。ご質問がありましたら、事務局までお気軽にお寄せください。

<2022 年度大会プログラム>

10月15日(土)		
	A会場(富士見ゲート4階 G401)	B会場(富士見ゲート4階 G402)
9:30-12:05	<p>パネル「シベリア出兵を見直す」 (10:05~12:05) 組織者：兎内勇津流 井竿富雄「琿春事件をめぐる被害者救済(仮)」 藤本健太郎「メルクーロフ政権とその周辺(仮)」 中谷直司「日本外務省の「新外交」呼応論とシベリアーロシア革命からワシントン会議まで(仮)」 コメンテーター：ヤロスラヴ・シュラトフ 司会：伊賀上菜穂</p>	<p>イゴリ・サヴェリエフ「20世紀初頭の東北中国における鉄道建設と人の移動—中東鉄道の活動を中心に」 (9:30~10:25) コメンテーター：左近幸村 司会：神長英輔</p> <p>ミニパネル “Russia’s Islamic Modernism Reconsidered” (10:35~12:05) Диляра Усманова, «В поисках «третьего пути»? «Ваисовский Божий полк староверов мусульман» между джадидистским и кадимистским дискурсами» Leila I. Almazova, “Is It Possible to Reform Islam? Ziyaaddin Kamali (1873-1942) and His Book Series “Falsafa Islamiya” (The Philosophy of Islam, 1909-1911) and Işlahat Diniya” (Religious Reformation, 1913)” コメンテーター：磯貝真澄 司会：長縄宣博</p>
12:05-13:30	昼休み(12:10~13:10 委員会：於大内山校舎(富士見ゲートの向い側) Y601)	
13:30-16:00	<p>共通論題 A「ロシアとウクライナ」 (富士見ゲート2階 G201) 三浦清美「中世ロシアにおける全ルーシ府主教座の動きから見るキエフとモスクワ—モスクワの覇権掌握プロセスについての考察」 福嶋千穂「ポーランド国家とルーシ(ルテニア)地域」 村田優樹「ロシア帝国の崩壊と「ウクライナ」の制度化 1914-1919」 コメンテーター：吉田俊則、梶さやか 司会：濱本真実</p>	
16:15-17:45	総会(2階 G201)	
18:00-	懇親会	

10月16日(日)			
9:30-12:00	<p>共通論題 B「戦争の時代の再来と歴史像の再構築」 (富士見ゲート2階 G201)</p> <p>第一部 「ソ連史・帝国史の脱「正常化」」 Ilya Gerasimov, “Why Is It Time for a New Soviet History” Discussant: Uyama Tomohiko Chair: Hanya Shiro</p> <p>第二部 「ロシア現代史の模索」 池田嘉郎「プーチン体制の歴史化とその困難 (仮題)」 立石洋子「ソ連解体後の自国史像 (仮題)」 コメンテーター：油本真理 司会：半谷史郎</p>		
12:00-13:00	昼休み		
	A会場(富士見ゲート4階 G401)		
	B会場(富士見ゲート4階 G402)		
13:00-13:55	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <p>石本雅之「ロシア帝国の宗教行政から見る1880年代から20世紀初頭におけるアルメニア・カトリック問題」 コメンテーター：浜田華練 司会：鶴見太郎</p> </td> <td style="vertical-align: top;"> <p>上垣彰「「レンド・リース」とソ連戦時経済：戦況への効果及び民生品供給を焦点に」 コメンテーター：富田武 司会：立石洋子</p> </td> </tr> </table>	<p>石本雅之「ロシア帝国の宗教行政から見る1880年代から20世紀初頭におけるアルメニア・カトリック問題」 コメンテーター：浜田華練 司会：鶴見太郎</p>	<p>上垣彰「「レンド・リース」とソ連戦時経済：戦況への効果及び民生品供給を焦点に」 コメンテーター：富田武 司会：立石洋子</p>
<p>石本雅之「ロシア帝国の宗教行政から見る1880年代から20世紀初頭におけるアルメニア・カトリック問題」 コメンテーター：浜田華練 司会：鶴見太郎</p>	<p>上垣彰「「レンド・リース」とソ連戦時経済：戦況への効果及び民生品供給を焦点に」 コメンテーター：富田武 司会：立石洋子</p>		
14:10-16:10	<p>パネル「帝政末期の境界地域における帝国と大衆(仮)」 (富士見ゲート2階 G201)</p> <p>高尾千津子「帝政末期ユダヤ人—内部の<分裂>とロシアとのアンビヴァレントな関係」 松里公孝「帝政末期右岸ウクライナの正教司祭とロシア人民同盟—右派ポピュリズムと村政治」 青島陽子「帝政末期の帝国と社会の接合の試み—西部境界地域の私学と初等教育」 コメンテーター：長縄宣博 司会：小森宏美</p>		

【例会レポート】

2022年6月21日（火）16:30-18:30

報告者：吉田眞生子（早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程）

報告タイトル：「サカリアス・トペーリウスの「フィンランド国民」概念—1860年代の議論から—」

コメント：池本今日子

場所：ハイブリッド：オンライン（zoom）＋対面（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター大会議室（403））

<報告概要>

中世以来スウェーデン王国の一地方であったフィンランドは、19世紀初頭の戦争の結果ロシアに割譲され、皇帝が大公を兼ねる大公国となった。それ以降、大公国の知識人は、政治的権利を持つ集団としての「フィンランド国民」の存在を主張するようになる。報告者は現在、フィンランドの代表的な知識人を複数取り上げながら、彼らの「フィンランド国民」概念の構築に長期的に注目することを通じて、19世紀フィンランドの国民形成について研究を進めている。本報告では、特に作家・ジャーナリスト・歴史の教授などとして活動したサカリアス・トペーリウス（1818–1898）を取り上げ、彼の1860年代初頭における「フィンランド国民」概念の構築を分析した。

19世紀初頭、ロシア皇帝は、フィンランドの大部分を占領した後に、ボルゴーという町にスウェーデン王国の法に基づく身分制議会を召集した。そこで諸身分から忠誠の誓いを受け取った後、「全フィンランド住民に対する皇帝陛下の慈悲深い保障」を与え、国の宗教、基本諸法、Constitutionに基づく諸特権と諸権利を保障した。この基本諸法および Constitution が何を指すのかについて、当初はフィンランドの知識人の間でも合意がなかった。しかし、1830年代末から40年代初頭のスウェーデンにおいて、ボルゴー議会での支配者の保障を皇帝と「フィンランド住民（Finlands inbyggare）」の契約とみなし、基本諸法および Constitution を戦争当時有効であったスウェーデン王国憲法として解釈した上で、「フィンランド住民」はこの憲法で定められた権利（諸身分をつうじた立法権を含む）を契約に基づいて有する、と主張する説が現れた。本報告では、この「ボルゴー議会の契約説」誕生の契機となった論争を整理した上で、1860年代初頭に、サカリアス・トペーリウスが同説を「フィンランド国民」概念の構築に利用するようになる過程、それに伴う彼のフィンランド史観の変化やその意図について検討した。

本報告は、「フィンランド国民」の存在を正当化する根拠としてボルゴー議会の契約に重点を置いたため、質疑応答では、教養層がスウェーデン語を使用した一方ほとんどの民衆がフィンランド語を用いていたという当時の言語状況もふまえ、知識人のフィンランド語やフィンランド語話者に対する態度についての質問を受けた。また、ロシア史の立場からフィンランドの事例がどう見えるかについて、多くのコメントをいただくことができた。（文責：吉田眞生子）

吉田報告の議論は、「フィンランド国民」意識のフィンランド大公国内部の発展を明らかにするとともに、ロシア帝国におけるフィンランド大公国自治の根拠に関するフィンランド側の議論を示すことにもつながるだろう。報告に続き、コメンテーターの池本はアレクサンドル一世のフィンランド政策をヨーロッパ国際政治の文脈から論じ、フィンランド大公国の信仰や特権を「温情的に」認めた経緯や意図について論じた。続く質疑応答では、身分制議会という古風な形態での議会の招集の意味や、ロシアの大改革との関連、「フィンランド国民」概念の内実、ロシア帝国内でのフィンランド自治に関する議論などについて、活発な議論がなされた。「ロシア史」では多様な諸民族・諸地域の歴史が複雑に絡み合っている。ロシアによるウクライナ侵攻という危機的な状況の中にあって、ロシア史研究会は、なお一層、境界地域の諸民族・諸地域の歴史との対話を積極的に行う必要があるだろう。(文責：青島陽子)

【献本について】

生田美智子『満洲からシベリア抑留へ 女性たちの日ソ戦争』人文書院、2022年

【新会員の紹介】

2022年4月～6月の新入会員（3名）をお知らせします。

竹内 大樹（2022年4月30日入会）

所属：神戸大学大学院法学研究科博士後期課程

専攻・テーマ：旧ソ連諸国における言語的少数派の統合と言語権保障

井口 拓哉（2022年5月6日入会）

所属：奈良大学文学部史学科

専攻・テーマ：1930年代後半におけるソ連外交

吉田 眞生子（2022年5月6日入会）

所属：早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

専攻・テーマ：19世紀フィンランドの国民形成

ロシア史研ニューズレター
第126号 2022年7月12日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(長縄宣博・松本祐生子)
〒558-8585
大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪公立大学大学院文学研究科濱本研究室気付
